

IT時事ネタキーワード「これが気になる！」(第96回)

2022年6月、IEのサポートが終了。至急の対策を

2022.06.08



2021年5月、マイクロソフト社は、Windows 10のWebブラウザ、「Internet Explorer (以下、IE)」の後継は「Microsoft Edge (以下、Edge)」で行うことを発表した。一般向けIEは2022年6月16日(日本時間)で完全にサポートを終了する。

IEは1995年のWindows 95からWindows 10に至るまでのWindowsファミリーに標準搭載され、30年近くの歴史を刻んできた。最盛期には90%以上のシェアを誇り、ウェブコンテンツ作成の事実上の標準になった。現行バージョンの11は2013年10月に公開されたものだ。

Windows 10から、IEの後継として開発されたEdgeが標準搭載されている。その理由は、「Webを取り巻く技術革新や市場の変化、日々更新されるWeb標準仕様、セキュリティ対策に根本的に対応するため」という。

2022年6月、Internet Explorerのサポートがついに終了

Edgeの初版は2015年だが、2020年に公開された新Edgeは、Google ChromeのコードベースでもあるChromiumで再構築され、それまでのEdgeHTMLベースの旧Edgeと大きく異なる。新EdgeはIE 11と完全な互換性を持つ「IEモード」を搭載、Chromeウェブストアの拡張機能も利用できる。

一方IEは、全盛期のIE

6から徐々にシェアが減り、ChromeやEdge、Firefox、Safariなどのモダンブラウザにシェアを明け渡している。Windows 10でのIEは互換性維持という立ち位置で「Windows アクセサリ」にひっそり搭載されている。「IEが終わるからって、一体何の支障があるの？」と思う人もいるだろう。

問題は、IEが長い間Web作成の標準となっていたため、IEのみで動作するよう作成されたコンテンツ(以下、「IEコンテンツ」)が、Webサイトや組織内のブラウザベースシステムに未だに多く存在するという事実だ。これらはIEコンテンツのため、依然としてIEが利用されているケースがある。法人、特に公的機関ではIEが推奨環境として現役であることが多いという。

終了後IEは起動せず、Edgeが起動。異例の「サポート終了」仕様に戸惑い… 続きを読む